武蔵野日曜聖書講筵

水源

――エレミヤ記第17章1～27節――

１９７４年12月１日
小池辰雄

終末的な希望　本願力に依頼む　水源に根を張れ　いける水の源なるエホバ　私の一生は兄貴の弔い合戦　永遠の泉　光の流れ（天国篇第30曲）　一回即絶対・一回即永遠

【エレミヤ17】

1 ユダの罪は 鉄の筆 金剛石の尖をもてしるされ その心の碑と汝らの祭壇
の角に 鐫らるるなり 2 彼らはその子女をおもうが如くに青木の下と高岡の
うえなるその祭壇とアシラをおもう 3 われ野に在る我山と汝の資産と汝のも
ろもろの財産および汝の四方の境の内なる汝の罪を犯せる 崇邱を擄掠物と
ならしめん 4 わが汝にあたえし産業より汝手をはなさん 又われ汝をして汝の
識らざる地に於て汝の敵につかえしめん そは汝ら我をいからせて限りなく燃
ゆる火を発したればなり

5 エホバかくいいたもう おおよそ人を恃み肉をその臂とし心にエホバを離
るる人は詛わるべし 6 彼は荒野に棄てられたる者のごとくならん 彼は善事の
きたるをみず 荒野の燥きたる処 塩あるところ 人の住まざる地に居らん 7 お
およそエホバをたのみ エホバを其恃とする人は 福なり 8 彼は水の旁に植
えたる樹の如くならん 其根を河にのべ 炎熱きたるも恐るるところなし その
葉は青く亢旱の年にも憂えずして絶えず果を結ぶべし

9 心は万物よりも偽る者にして甚だ悪し 誰かこれを知るをえんや 10 われ
エホバは心腹を察り 腎腸を試み おのおのに其途に順い その行為の果によ
りて報ゆべし 11 鷓鴣のおのれの生まざる卵をいだくが如く 不義をもて財を獲
る者あり 其人は命の半にてこれに離れ その終に愚なる者とならん

12 栄の位よ 原始より高き者 わが聖所たる者 13 イスラエルの望なるエホ
バよ 凡て汝を離るる者は辱められん 我を棄つる者は土に録されん 此はい
ける水の源なるエホバを離るるによる 14 エホバよ 我を医し給え 然らばわれ
愈ん われを救いたまえ さらば我救われん 汝はわが頌るものなり 15 彼ら我に
いう エホバの言は何にあるや いま之をのぞましめよと 16 われ牧者の職を退
かずして汝にしたがい 又禍の日を願わざりき 汝これを知りたもう 我唇よ

りいづる者は汝の面の前にあり 17汝我を懼れしむる者となり給う勿れ 禍の時に汝は我避場なり 18我を攻る者を辱しめ給え 我を辱しむるなかれ 彼らを怖れしめよ 我を怖れしめ給うなかれ 禍の日を彼らに来らしめ 滅亡を倍して之を滅し給え

19エホバ我にかくいい給えり 汝ゆきてユダの王等の出入する民の門及びエルサレムの諸の門に立ちて 20彼らにいえ 此門より入る所のユダの王等とユダのすべての民とエルサレムに住めるすべての者よ 汝らエホバの言をきけ 21エホバかくいいたもう 汝ら自ら慎め 安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にいる勿れ 22また安息日に汝らの家より荷を出す勿れ 諸の工作をなす勿れ 我汝らの先祖に命ぜしごとく安息日を聖くせよ 23されど彼らは遵わず 耳を傾けず またその項を強くして聴かず 訓 をうけざるなり

24エホバいい給う 汝らもし謹慎て我にきき 安息日に荷をたずさえてこの邑の門にいらず 安息日を聖くなして諸の工作をなさずば 25ダビデの位に坐する王等 牧伯たち ユダの民 エルサレムに住める者 車と馬に乗りて この邑の門よりいることをえん また此邑には限りなく人すまわん 26また人々ユダの邑とエルサレムの四周およびベニヤミンの地と平地と山と南の方よりきたり 燔祭 犠牲 素祭 馨香 謝祭を携えて エホバの室にいらん 27されど汝らもし我に聴かずして安息日を聖くせず 安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にいらば われ火をその門の内に燃やしてエルサレムの殿舎を燬かん その火は滅ざるべし

●終末的な希望

今、いろいろ原稿を頼まれて、そして、この秋は非常に東奔西走、南船北馬したから。

〔註：10月中旬、第19回全国中学高等学校理事長・校長研修会に参加のため札幌へ。帰宅した翌日は箱根で全校教職員の懇親会。獨協高等学校の修学旅行引率で九州（10/25～11/1）へ。帰京後、野尻高原の山小屋に閉じこもり原稿書き。数日後、三重県名賀郡青山町の愛農学園農業高校で講演。その後直ちに名古屋の全国普通科高校校長会議に参加、会議後の親睦旅行で飛騨の高山を訪ねる。京都秋期特別集会で京都三高会館で講筵（11/16～11/17）。静岡県裾野市の小学校講堂で文化講演会（11/23）。（著作集第9巻／第6章／獨協学園／六、「神・天然・福音」より）〕

忙しくてなかなか筆が執れなかったのを、ちょうどストなんかあったものですから、このストのお陰で一日で書いてしまった。そういう有り難いことであった。ヒルティ論の第7、8回目を書いたわけです。

実は今日、誰かが集会をしてくれれば、私は二階に引っ込んで、原稿を書けたということもあるかも知れませんが。まぁしかし、私は時間をケチケチしない。みんなと楽しくや

る時には、忙しくても楽しくやってしまう。そうすると今度は、少し祈って眠れば、3時間でもって目が覚めて、それから午前3時頃から仕事をするということもできる。神さまからのエネルギーというものは本当に有り難いということを体験するわけです。

今日は、エレミヤの17章です。

1ユダの罪は鉄の筆 金剛石の尖をもてしるされ その心の碑と汝らの祭壇の角に鐫らるるなり

まぁ凄い言葉です。これは毛筆ではない。鉄ですから。それから、金剛石のとがりですから、これほど堅いものはない。それで刻まれるというのですから、もう永久に消えないぞと。そういった「鉄の筆」というような言い方はヨブ記19章24節にも出ています。

24「望むらくは 鉄の筆と鉛とをもて之を永く磐石に鐫つけおかんことを

石筆というものはみんなとにかく何年たってもその字が消えないような、これは東西どこでもやるわけですが。自分の言葉を何とかして伝えたいと。

25われ知る 我を贖う者は活く 後の日に彼かならず地の上に立たん

この25節以下、これは素晴らしい。旧約聖書の中で最も深刻な力強い言葉のひとつと思われます。

26わがこの皮この身の朽ちはてん後

人生70年だそうですが、私はもうじき終わりかも知れません（笑）。

われ肉を離れて神を見ん 27我みずから彼を見たてまつらん 我目かれを見んに 識らぬ者のごとくならじ 我が心これを望みて焦る 28なんじら若われら如何に 彼を攻めんかと言い また事の根われに在りと言わば 29剣を懼れよ 忿怒は剣の罰をきたらす 斯くなんじら遂に審判のあるを知らん」（ヨブ19・24～29）

ヨブが自分の義を必ず贖って――こんなに傷つけられているが――贖い返してくれるものがいると。これは新約的な角度からみれば、もっと素晴らしい意味になります。旧約におけるこういった切なる祈りがやはりキリストに集中しているわけです。また我々の切なる祈りは、再臨のキリストに集中するわけです。新天新地が、神の国がもし来ないならば、

「人生は空の空なるかな、すべて空なり」

です。けれども、神の国は必ずくる。どういう様でくるかは、これは分からん。聖書そのものが暗号ですから。とにかく、そういう熾烈な希望――希望というのは自分の側の単なる願望でなくて、神さまのむしろ「約束」といってもいいわけです――我々の「信望愛」というこの望は、神の言葉の約束であり預言である。預言であり約束であるものが我々の希望であって、その他に確かな希望はないわけです。

まぁ70歳にもなると、私はまだ元気ですけれども、70にもなると、ゲーテもちょうどその頃にエッカーマンと語っている言葉があります、

「時々、私は死のことを思う。けれども、それはひとつも自分には暗くない」

と彼は言っています。我々にとっても、キリストの永遠の生命にあるものは――人間として感情的に死というものは決して好ましいものではないけれども――もうひとつ奥の目をもって、心をもって、魂をもってこれに対する時には、これが本当に内的に霊的に乗り切られてないというと、やりきれない。

そういった終末的な希望というのは、私はこのキリスト教に入る最初から持っていた。藤井先生の所に出掛けて行って、最初に聞いたのが黙示録の終わりの方です。妙なものです、

「終わりは始めなり」

という。そして、藤井先生の所で最後に聞いたのが黙示録の終わりですし、終わりから出て終わりに帰った。「6月30日」〔註：１９３０年6月30日の最後の集会の司会を小池が行い、その2週間後に藤井武は亡くなる〕というのは今でも忘れません。

●本願力に依頼む

イスラエルの罪はそれほど消せないほどであるという。

彼らはその子女(こどもら)をおもうが如くに青木の下と高岡のうえなるその祭壇とアシラをおもう

子供を思うことは親の自然ですが、それと同じように、「青木の下と高岡のうえなるその祭壇」というのは、みなこれは偶像崇拝の社(やしろ)のしつらえられているような所なんです。出エジプト記34章にちょっと出ていますが。

3 **われ野に在る我山(わが)と汝の資産(もちもの)と汝のもろもろの財産(たから)および汝の四方(よも)の境(さかい)の内なる汝の罪を犯せる崇邱(たかきところ)を擄掠物(ぶんどりもの)とならしめん** 4 **わが汝にあたえし産業より**

カナンの地のことを「産業」という。

汝手をはなさん 又われ汝をして汝の識(し)らざる地に於て汝の敵につかえしめん そは汝ら我をいからせて限りなく燃ゆる火を発(おこ)したればなり

バビロニヤ捕囚の預言があるわけですね。そこで、

5 **エホバかくいいたもう おおよそ人を恃(たの)み肉をその臂(ちから)とし**

「肉」というのは「人」と同じことで、「バーサール」という字です。「アダーム」という字と「バーサール」という字を使ってあります。「アダム」「人間」を頼みとし、「肉」即ち生来の人間というものを――ヘブライの文句はよく対句になっていますから――「人を恃み肉をその臂(ちから)とし」というのは、「人」と「肉」がシノニムに、同義語的に使ってあるわけです。「恃(たの)む」ということと「臂(ちから)とする」ということは同じことです。

心にエホバを離るる人は詛(のろ)わるべし

と。

「鼻から息の出入りする者を頼みとするな」

というのはイザヤ書2章22節に出てくる言葉ですが、同じことです。

「22**なんじら鼻より息のいでいりする人に倚(よ)ることをやめよ 斯(かか)るものは何ぞか ぞうるに足らん**」（イザヤ2・22）

2の22だから覚えやすい。こういう章節は、私が20代の時に旧約をずいぶん読んだから、その時の記憶が今でも残っているわけです、別に調べなくても。

「人間は人間を頼みにしているうちはどうにもなりません、お互いに風に吹かれる葦みたいなものだから」

ということです。

彼は荒野に棄てられたる者のごとくならん

「荒野に棄てられたる者」というのは、何か灌木のことを暗に言っているとの話です。

彼は善事(よきこと)のきたるをみず 荒野の燥(かわ)きたる処 塩あるところ 人の住まざる地に居らん 7おおよそエホバをたのみ エホバを其恃(たのみ)とする人は福(さいわい)なり

これは非常に力強い言葉です。「福(さいわい)なり」というのは

「バールーク」

という字で、「恵まれたるかな」という受け身の形です。スピノザの名前が「バールーク スピノーザ」といって、「恵まれたる者 スピノザ」という名前です。いい言葉ですから覚えておいてください。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

という、あの「マカリオイ」というギリシア語が、ヘブライ語でいうと、あそこのキリストの言葉はみなこの「バールーク」になるわけです。

「恵まれたるかな」「恵福(けいふく)なるかな」

という。「幸福論」というけれども、本当は「恵福論」なんだな、ヒルティのあの『幸福論』という「幸」の字は、本当は「恵」と書きたいところです。しかし日本語としては「恵福」という言葉はないからね。手島さんと私くらいだよ、こんな字を使っているのは。

エホバをたのみ エホバを其恃(たのみ)とする人は福(さいわい)なり

藤井先生はしょっちゅうこの「信頼」ということを言っていました。「フェアトラウエン」(vertrauen 信頼する)、神さまに全部委ねる。委ねて「自分は何もしない」ということではないですよ、この信頼という言葉は。ヘタするとそういうように聞こえる、棚からぼた餅式に。信頼して生きる生き方は、自分の方の力を抜いているから、向こうの力がくるんですから、もの凄い力強い生き方なんです、信頼というのは本当は。だから、本願の力に、本願力に依頼(よりたの)むんだから、本願力がやってくるわけだ、信頼というのは。何か信頼がサムシングであるように思ってはいかんですよ。信頼でも、投げかけでも、棄身でも、何でもいいです、言葉は。エホバに依頼む。「依頼(よりたの)む」というと、依頼んで「私はノホホン」なんて、そんなのではない。依頼んで力を受けなくては、依頼みの実がこないわけですから。

●水源に根を張れ

京都で、「本日一生」〔1974/11/10「本日一生」（京都秋期特集第1回集会、マタイ6・22～34）〕という話をしましたね。毎日毎日を一生として動く。それが本当に信頼の動き方の、在り方の極致ですから。7節は、

「エホバを頼み、エホバをその頼みとする人は恵まれたるかな」

ということ。

8**彼は水の旁(ほとり)に植えたる樹(き)の如くならん　其根を河にのべ　炎熱(あつき)きたるも恐るるところなし　その葉は青く亢旱(ひでり)の年にも憂えずして絶えず果(み)を結ぶべし**

この句はもう――私が申すまでもなく――皆さんが暗記していい句です。詩篇第1篇と相応じますが。詩篇1篇は、ひょっとしたらエレミヤのここから来ているかもしれない。さっきの「人に依頼む」という言葉でちょっと思い出したのは、イザヤ書31章3節、

「3**かのエジプト人は人にして神にあらず　その馬は肉にして霊にあらず**

ここにも「人」という字と「肉」という言葉が使ってある。エジプトがどんなに強国で強いといったってダメだ。エジプトに行ったり、アッシリヤを頼りにしてもダメだと。「神」と「霊」これもまた対句になっている。いつもそういう読み方をしてくださいよ、バラバラに読まないように。神は霊なる存在ですから。

エホバその手をのばしたまわば　助くるものも躓き　たすけらるる者もたおれて　みなひとしく亡びん」（イザヤ31・3）

お互いに人間同志で助けたり助けられたり――もちろんある意味においては結構なことですけれども――この場合はそういう意味でなくて、

「神を抜きにして、そんなことをやっていても、どっちも滅びてしまうぞ」

と。「水の旁(ほとり)に植えたる樹の如く」と。あとの方にもうひとつ似たような言葉が出てきます。そこで今日は「水源」という題にした。水の源(みなもと)。「水源」の「水」の字はなくたっていい、「源」だけでも。「みなもと」というのはいい言葉だな。水のもとだものな。「水源」と題しましたが、もう一つここに何か句を書こうと思った。

「水源に根を張れ」

という題だと思ってくださいよ。私たちの魂の根を、存在の根を水源に張る。みなもとに。だから、根源という。水の源に根を張ると、それは根源的な在り方になる。根源の相となる。我々自身が根源的なひとにならなければダメなんです。

もう私はそれを思うだけで、何か異言がこの胸の中に来てしまう。言葉が言葉にならなくなる。直ちにその現実に入る。私は無教会時代には、そういうところになかなか来れなかったんだな。御霊の世界がなかったから。あなた方はもうとにかく大変な福音に、今接しているわけですから、ちょっとやそっとのことでガタガタしてはダメですよ。

この水源みたいな所、水源は地下水です。胡桃(くるみ)なんていう樹はその地下水の水脈の所に

生えるそうだね。地下水がないとダメだそうだ。ただいい加減に移植したって、それはダメだそうだ。ああいう堅い殻をもった実。とにかく、自然は不思議でしょうがないですね。水源に根を張ると、どんなに日照りがあっても、これが青々としている。そして、絶えず実を結ぶ。日照りでもめげずという。それは地下水があるから。涸れない水源ですから。

9心は万物よりも偽る者にして甚だ悪し

エレミヤというひとは心の預言者です。イザヤは霊。エレミヤは心、ハート、心腸です。

「人の心腸を見給う万軍の主よ」

なんていう。心と腸です。

9心は万物よりも偽る者にして甚だ悪し　誰かこれを知るをえんや

と。まず心理学者としても――もし学者になれば、エレミヤは心理学者にも、サイコロジストにもなれる――だけれども、心理学というものは窮極のものではないですよ。

エレミヤはよく人を見た。ヒルティさんもよく人を見た。「メンシェンケントニス」(Menschenkenntniss)「人間知」という文書を『幸福論』の第二巻に書いてます。塚本先生なんてのもなかなか人をよく見えるひとだった。ということは、ただ冷たい目で見ているのではない。エレミヤはいろんな同胞の在り方、悩み苦しみ悲しみ、いろいろなものを、また悪い奴らのすること、その心根、それをよく洞察していますから。

人間の心の中には天国と地獄があるからね。天国と地獄で葛藤しているから、現実は煉獄というわけだ。ダンテは、何といってもこれは凄い詩人です。私もこの頃またダンテを繙いています。私はいろいろ読んだわけでもないけれども、世界の最大の詩は――『ファウスト』も凄いけれどもね、とにかくゲーテというやつは――けれども、ダンテの方が何といっても、宗教性のもっと強い深い豊かなものはやはりダンテの方だと思います。

「人間性」「メンシュリッヒカイト」(Menschlichkeit) を映し出し、またそれを渾然として大調和にもっていった人というのはゲーテです。「神・自然・我」という、また人間界というものを、本当にマクロコスモスをミクロコスモスとして集約して自分の中で限りない展開をしているようなのがこのゲーテという男ですから。そういう意味においては、「メンシュザイン」(Menschsein)「人間でござる」ということにおいては、ゲーテにかなう人はちょっとないでしょうね。

ダンテとなるとこれはもっと――もちろん彼も非常に人間ですけれども――そこに神的なものがグーッと浸透している。そういう意味においては、ダンテの方が好い。私はイタリア語をやって、イタリア文学を、ダンテ専攻にした方がよかったと今思うくらいです。

●いける水の源なるエホバ

第一流の人たちはよく人が分かっている。絵描きでも最後はやはり人間です。ブラウニングも、

「人間の最後の対象は人間である」

と言ってます。人間というのは本当に自然をも映し、神をも映すし、地獄をも映すし、しょうがない野郎なんだ、人間というものは。実に「人間、この不可解なもの」という本〔カースン・マッカラーズの短編？〕もありますけれども。だから、我々の心の中に映ってくるものをみんなさらけ出したら、大変なもんです。人間なんていうものは、矛盾そのものみたいだ。だから、

「心は偽る者にして甚だ悪いものだ」

という。手放しにしたら、人間はしょうがないものだ。救いようがない、手放しでは。救いを要するんだけれども、手放しだったらどうにもならん。

けれども、宗教の「宗」の字も何も知らない、キリストの「キ」の字も、お釈迦さんの「釈」の字も知らない人が、非常に神の子、如来の子みたいな人もいますよ、世の中には。善良そのものの、その人を見れば拝みたくなるような人もいます。

まぁとにかく、総じていうならば、「偽る者にして甚だ悪いものだ」と。特にイスラエルの滅びる頃の、その惨憺たる現状を見て、エレミヤはそのことをひしひしと思ったわけだ。

10 **われエホバは心腹を察り**
今度は、エホバの答えですよ。「心腹」を、人の腸を――ヘブライ語で一々申しませんけれども――腸を、五臓六腑をさぐり、

腎腸を試み

この「腎腸」の方がその五臓六腑式な言葉です。

「わが体は汝を慕う」

なんていう詩篇63篇にあったのと同じ言葉です。

おのおのに其途に順い その行為の果によりて報ゆべし
どんな歩き方をしたか、どんな事をやったか、その実存そのものを、「ザイン」（Sein 存在）と「タート」（Tat 行為）を、どっちも尋ねるぞと。

「その業に従って報いをする」
というような言葉はちょこちょこ出てきます。新約のキリストの言葉にもある。心と心の奥と、それから在り方と行為と、それをたずねる。そうするともう、人間は正に罪びとであって、どうしようもないというのが、パラダイス・ロストの人間たちの姿だというわけだ。だから、

「人間頼みではダメだ、神さまに帰れ」

ということです。

11 **鷓鴣のおのれの生まざる卵をいだくが如く**
そうなんですか、これ？　誰か知ってますか。ちょっと私は百科事典を引っ張ったけれども、書いてないんだ。シャコは己の生まざる卵をいだいて、出来上がると捨ててしまうという

ことらしいよ、これ。

不義をもて財を獲る者あり　其人は命の半にてこれに離れ　その終に愚なる者となら

ん

「愚かなる者」というのは、ただバカということではない。不信なる者、宗教的な節操のない者のこと。ホトトギスは生んだ卵を他の者に抱かせて孵化するなんて、こういう怠け者もいますけれども。自分の子供をあまり構わないのを、「ホトトギス・ママ」というね（笑）、「シャコ・ママ」もいるらしい。

12 **栄の位よ　原始より高き者　わが聖所たる者**　13 **イスラエルの望なるエホバよ**

もちろんエホバのことを畏みかけてこういうように形容したわけです。「わが聖所」という。エレミヤはあまり神殿は好きではないけれども、特に「高き者、わが聖所」というのは、「地上の聖所ではない」という、むしろ預言者のそういった気持をここではとらなくてはいかんと思います。

「イスラエルの望みなるエホバよ」

と、どんなことがあっても、神さまは、望みは望みなんだと。「国は滅びても山河あり」ではなくて、国は滅びても民族あり、

「わが国はこの世のものにあらず」

という。何がどうなっても、あのルッターの讃美歌と同じように、

「財でも体でも子供でも妻でも何でも奪るならとれ。神の国はなお我々に留まる」

と。そういうような具合に、何がどうなっても、絶対に退かん、絶対に失われない。いいですか、それだけの気合を持っていなければダメですよ。

「神さまに信頼して飢え死にするなら、死んでもいいじゃないか」

と、藤井先生は言った。藤井先生は全くそういった気合の実存をもって生きていた。いつかつも言った通り、先生が亡くなった時、財布の中はからっぽだったという。

凡て汝を離るる者は辱められん　我を棄つる者は土に録されん

「土に録されん」というのは、石に録される者は消えないんだけれども、土に録される者は消えてしまうということです。そんなものは壊れてしまってダメになると。

此はいける水の源なるエホバを離るるによる

「いける水の源」、これが今日の題の「水源」です。8節と今の12節、これが中心になるわけです。

エレミヤ記の19節以下は、エレミヤの言葉とは普通、学者も言わない。エレミヤがこんなことを言うはずはないというわけです。安息日のことをえらく言っているから。

14 **エホバよ　我を医し給え　然らばわれ愈ん　われを救いたまえ　さらば我救われん　汝はわが頌るものなり**

これは力強い言葉ですね。

「エホバよ 我を医し給え 然らばわれ愈ん　われを救いたまえ さらば我救われん」

と。霊肉渾然たるものだ、癒し救うというんだから。魂の救いと体の癒しです。

「心身共に私を本当に救ってください。神さまが癒そうとしなければダメです」

と。

●私の一生は兄貴の弔い合戦

お医者さんが、本当にそういう意味で、

「私はあなたのただ助手になります」

と、医者が。看護婦さんを助手にして、自分は主だなんて思ったら、医者は大間違い。医者も看護婦さんもみんなこれは神さまの助手です。

「あなたの力で我を癒し給え」

と。エホバは医者です。

「われは医者なり」

という言葉が申命記かどこかにあった。また、神さまは救い主。救い主はもちろんキリストにおいて具体的にあらわれた。キリストがまた具体的に癒し給うた。死人まで甦らせ給うた。これはみんな天的な現実の予表であります。

信仰のある人たちは、「癒し」のことを非常に卑しいとしまして、信仰には少し妨げになるようなことを言ったが、そうじゃないです。そればっかりやるのも、これはもちろんまた現象にとらわれてうまくないですけれども。神さまは、私に言わせれば、もう癒しも救いも、魂も身も、心身共に――「身心」というのは、禅宗では先に「身」を書くんだね――共に今、現に根源的に私たちを癒しておられる。いつも根源現実に、源に立ち返っている。祈られたことが果たして聞かれたか。

「祈られたことは必ず聞かれますよ」

と、大いに言う方もあります。それも結構です。けれども、聞かれたことを喜ぶのではなくて、聞かれる奥の世界を見ている。現象面ではズレようがズレまいが、どっちでもいいんだ。大事なのは奥の世界で、

「本当に私は天国の現実にいます。大病に罹っても、癌にかかっても、私は健康者です」

という、そのような信仰の現実が一番本ものなんです。どうせ我々はいつか、何か病気みたいなものにかかって、誰でも――「万人これ罪びとなり」と同じように――万人これ病人なんだ、ある意味においては、相対的現実では。

……ヘタすると、そんなことをして却って悪くしたり何かする。事実、そういう例をい

くつも私は聞いている。

「自分は脳血栓のきらいがあるかもしれないが」

といって、医者にみてもらったら、診察で妙なことをされて、却ってヘタをやられて死んでしまった人がある。とんでもない。

「医者は殺す者なり」

なんて（笑）、お医者さんがそう言ったですよ。だから、医者というものは本当に畏れかしこんでいなければいかんということです。

とにかく、その根源の世界では、

「本当に自分は、神の健やかなる生命と、キリストの贖いにおける聖霊の生命、魂をいただいている」

と。これを受けとらなくては。私は無教会時代を思うと、情けないよね。信仰の質（たち）は確かにいいんだけれども、やっぱり観念なんです。心まで来ているんだけれども、本当に魂の根源に来ていない。どんなことがあっても、死んでも死なないんです。

どうぞ、皆さんは、その点で本当に使徒たちの信の世界に入ってください。預言者たちはキリストが来ていなかったから、まだそこまで本当には入っていなかった。何といっても、このキリストの直弟子たち、使徒たちはその世界に入っていた。

そうすると、相対的な現実も知らない間に変化していく。神さまは、行き詰まったと思ったら、豁然として開示したもう。そういうことはいくらでもある。

「この人をまだ使おう」

というときにはそうなんだ。けれども、人生は割り切れませんよ。

たとえば、私の兄貴なんか27歳で死んでもらいたくなかった。

「まだまだ御用がある」

と彼は電報で言ってきました。

「治ったら支那伝道でもやろう」

と思っていたらしい。それは割り切れないです、27歳で仆れてしまったから。まぁ母にしてみれば、そんなことはありえなかった。だから、失明してしまった。私はそのような割り切れないものを背負っているわけだ。

「私の一生は兄貴の弔（とむら）い合戦だ」

ということをいよいよ思うわけです。そのくせまだ弔い合戦の実が――まぁある程度、相対的にはやりましたけれども――これからが最後の決戦、関ヶ原というわけです。まず旺（さか）んなものですよ、私の中に燃えているものは。

「眠るは覚めんがため。倒れるは起きんがため。前進また前進。私が死んだら、歓呼の声をあげて、なお前進せよと言ってくれ」

と。私はブラウニングの「アソランドの跋（ばつ）」の詩は今度、ヒルティにも書きましたけれども。

キリストにある信というのは、
「汝われを癒したまえ」
ではなくて、
「汝われを癒したり」
なんだ。今度は新約で読むと、
「エホバよ 汝われを医したり。然らばわれいよいよ健やかなり。汝われを救いたまえり、さらば我はいよいよ救われる」
ということ。
「癒したから、いよいよ癒されていく。救われたから、いよいよ救われていく」
というのが、新約の言葉です。完了から始まるんですよ、現在完了から未来完了に向かっていく。単なる理想主義でも、相対的現実主義でもない。もうおよそ本当の福音の世界は、善きイズムなんていうものは全部入ってしまっている。だから、
「主義主張なんて言いなさるな」
ということ。福音はもし言うなら、曰く言い難し。これ表現しがたい。
さすがにゲーテは最後のところで、
「名状し難きものここに成る」
と、『ファウスト』の最後のあの一段は素晴らしい、さすがにゲーテだね。私は大好きなんだ。あなた方はゲーテの最後のところは書いて書斎に貼っておけよ。あれは福音的な角度から本当に真理だから。あなた方、少しそういうバカなことをしませんか。私は時々、あなた方の書斎を見に行こうかな（笑）、そういう気合で生きているかどうか。まぁそれは冗談ですけれども。

15 **彼ら我にいう エホバの言は何にあるや いま之をのぞましめよと** 16 **われ牧者の職を退かずして汝にしたがい 又禍の日を願わざりき 汝これを知りたもう 我唇よりいづる者は汝の面の前にあり**

その通りだと。これはエレミヤの告白であり、祈り心の告白です。

17 **汝我を懼れしむる者となり給う勿れ 禍の時に汝は我避場なり** 18 **我を攻る者を辱しめ給え 我を辱しむるなかれ 彼らを怖れしめよ 我を怖れしめ給うなかれ 禍の日を彼らに来らしめ 滅亡を倍して之を滅し給え**

まぁそこらはやはりなかなか凄い復讐の気持が――「復讐」といってはわるいけれども――とにかく、「ダメなものは滅びよ」というわけだ。エレミヤという人の心は、非常に執り成しの深い、また涙の深いところがあるかと思うと、また激しく責めるところもある。

●永遠の泉

そこで、少し散歩をしたいわけです。ダンテの『神曲』の煉獄篇の15歌の130行に、

「永遠（とこしえ）の泉より注ぎ出る平安の水に
言い逃るることなく汝の心を開かしめんため
このことが汝に示される」

と。ここに、「永遠（とこしえ）の泉より注ぎ出る平安の水に」という言葉がある。永遠の泉。私たちにとってはキリストが「永遠の泉」です。

「これを飲めば渇くことがない」

と。これはヨハネ伝の第4章、サマリヤの女との会話のところです。

「わが水を飲む者は永遠に渇かない、活ける水だ」

という。活ける水、活水であり、永遠の水である。……。「永水」なんていう言葉はないけれども、永水だ。とこしえの水。水は霊です。ただ水だと思ってはいかん。「霊水」である。この「活ける水」とは即ち御霊、霊のことを言っていたと、ヨハネ伝7章に書いてある。そういわけで、面白いね。

「水火相容（い）れず」

というけれども、霊は、ある時は火といわれ、ある時は水といわれる。熱しては火となり、注いでは水となる。火は上に昇る。水は下にくだる。上昇下降自在なるものです、聖霊は。上昇下降自在なるもの。

「この火燃えたらんにはまた何をか要せん」

「この水を飲めば絶対に渇かない」

と。やっぱりこの「四大」というものは――地水火風という――風は気だから霊なんだ。

「風は、何処（いずこ）より出て何処へ行くかを知らざる如くに、霊もまたかくの如し」

とキリストが言った。ヨハネ伝3章。だから、「地水火風」というのは要するにこの聖霊のことです。

地は、大地は一切のものを荷（にな）っている。全部呑み込んでしまって荷っている。そして活かす。母なるもの、深い愛です、地の世界は。そういう愛の荷いが地なんだ。全部を包摂している。大きなビルディングだってみなこれ大丈夫なんだ。ビルディングを建てれば、地球はへっこむかというと、へっこみはしない。しかし、この荷いの地がひとたび怒ったら大変です、地震というやつは。どんなものもみなぶっ倒れてしまう、本当の地震が来たらば。

しかし、我々は今度は霊震にぶつかっている。霊震にぶつかって霊震を受けると、これは聖霊のバプテスマになる。霊動の世界です。私は十字架を冥想して1時間も祈っていたら、大変なことになったね、こないだ。それで奥田君の家がガタがきた（笑）。それは冗談ですよ。しかし、あれはしょうがないですよ、悪かったが。止めたけれどもね、途中から。

〔註：1974年11月16～17日の京都秋期特集のとき、小池は奥田昌道教授の自宅二階に宿っていたが、早朝、床の上で祈っていたとき、霊動を起こし二階の床がガタガタと揺れて、地震が起きたかと下に居た家人は驚いたという。「奥田君の二階でただひとり、晨一時間ほど

深い祈りをしていたら、十字架の主の冥想のうちに、十字架の門をくぐって詩篇23篇の如き天界のパラダイスに導かれ、うれしくてたまらなく、からだがものすごい霊動に入り、霊震が起きた。全身が火のように熱くなった」（著作集第9巻／第6章／獨協学園／六「神・天然・福音」より）」。

あなた方、時にはね、本当にバカにならなければダメですよ。みんな利口すぎるんだ。ひたむきのバカにならなくては。「これは気が狂ったか」なんてね。

「神のためには狂えりなり」

と、パウロが言っているじゃないか。なにも狂った様子をする必要はないよ、髪をボウボウにして何かキチガイみたいなのは困る。キリストは、

「断食する時もちゃんと油を塗れ」

と言う。私は油を塗るとペッタリしてしまうから塗らないけれども（笑）。私はキリストの油を塗られているから、そこらの油は要らないんだ。キリストの油は素晴らしいからね。

どうですか、あなた方は私の話を聞いていると面白いですか。「面白い」というのは、ただ面白いのではなくて、本当に共感して、面白いということ。

『神曲』で一番、水で素晴らしい所は、天国篇の30曲。これは読むと大変だから読まないけれども。忘れないでくださいよ。30曲の38行あたりからずーっと。これはもう清火天の最高の世界に来ての光景を光の流れに彼はたとえている。光の流れ、光流。流れというやつは水だからね、この水は光である。光波、光の波。それはもうひとつ別な言葉でいうと、霊波です。霊の波動。この霊波というのが一番凄いんだ。これはもう時間空間を超越してしまう。

とにかく、別な天体には人間よりか遥かに凄いやつがどこかにいるらしいね、円盤〔UFO〕なんかをぶっ飛ばしたりして。あれは本当なんだよね。もっと人間はもうひとつ霊的にならなかったら、地球は滅びてしまうぞと。

「地球は滅びるぞ。お前たちはダメだ、本当に神に帰らなければダメだ」

と警告しているらしいよ、あれは。

あなた方、信仰を受けて、これはただ「自分の幸いだ」なんて、そんなことではないです。使命がある。一人びとりがもう原始力的な爆発力を持っていなければ、ダメなんです。そうでないクリスチャンなんてのは何ごとかと。悩みも苦しみも全部すっ飛ばしてしまう。

キリストは、悩んでいること、悲しんでいることを、ただ「幸い」なんて決して言っていない。それは、

「幸いなるかな、悲しめる者」

という御言はありますよ。けれども、悲しんでいることが幸いではない。これはみんな、

「歓びの世界に入れられるから、救われるから、だから幸いだ」

ということで、それ自体をただ肯定しているのではない。ところが、

「驕れる者は禍なるかな」

なんです。自分は善いと思って幸いだと思っているやつは、却って禍だと。というのは、

「相対的な現実を肯定していてはダメだ。絶対的な現実を見ていけ、聞いていけ、そこに生きろ」

と。これは水源であるところのキリストに連なって、聖霊が自分の中に流れているような人。霊血であり、霊の血であり、霊の肉となって、生きていなければ。

だから、キリストみたいなひとは山上でもって変貌するわけです。甦るわけです。「甦る」とは、ただ元の息を吹き返すというのではない。本当の彼の本質が現れるということです。パウロが、

「この地上を離れてキリストと共にいたい」

というのは、彼の中に旺んなこの生命が来ているからです。

「この朽ちゆく幕屋をあとにして永遠の幕屋を着たい」

という。幕屋のことも今度は書きましたからね、今月号の『生命の光』に。〔註：「露わなる幕屋」――全国牧者会の講演より（後篇）１９７４年７月22日夜――（『生命之光』291号、１９７４年12月・１９７５年１月発行）〕

そういう活ける水の源なるエホバ、活ける水の源なるキリスト。聖書を読む時に必ず眼光紙背に徹してください。単に文字にこだわっていたらダメですよ、私みたいに図太い読み方をしないと。

●光の流れ（天国篇第30曲）

ダンテの天国篇を読みます。

「かくて光は河の形となり
妙なる春を彩る両岸の間に
照り輝くを見たりき。
この流れより活ける火花注ぎいで
両側の花に落つるさま
宛ら黄金に囲まる紅玉に似たり。
斯くて後香に酔えるがごとく
自ずから奇しき奔流に再び沈み
入るもあれば又飛び出づるもありき。
この光の流れの中を歓喜でもって躍っている人たちのことです。
……
この水をなんじは飲まねばならぬ。」（『神曲』天国篇第30曲61～74行、中山昌樹訳）

云々と、ずっと非常に長く出ていますから、光の流れのことが、ダンテの『神曲』の。

……私は実は一高〔第一高等学校〕に本当に入りたかった。あの柏の葉の徽章は我々の若い時のあこがれだったんだよな。あの帽子をかぶりたくてね。私の兄貴がとにかく一高だったものでね。叔父さんの厄介になったから、もし一高を落ちたら悪いと思って、水戸を受けた。ところが、水戸を三番で入ったから、一高にも入れたわけで、もう癪にさわって（笑）、ひとつも嬉しくないんだ。私は高等学校に入った時は、ちっとも嬉しくないんだ、一高に入りそこなってしまったものだから。

中学に入った時には嬉しかったよ。6倍の倍率でもって、数学を一題まちがえて、「これはいけねぇ」と思って、もう発表を見に行くのをよそうかと思った。まぁおずおず出掛けて行ったら――今でも覚えているけれども――小使いさんが壁に巻紙をだんだん繰り広げていく。私のは受験番号60番。広げていくうちに、裏からちょっと写ったんだよね（笑）。

「ああ、入った、入った！」

なんてなわけで、嬉しかった。帰ったら、兄貴が、

「よし、それじゃ連れて行ってやる」

と言って、浅草の活動写真館、帝国館と電気館と二つ見せてくれたよ（笑）、楽しかったなぁ。そういうのは忘れられない。ところが、高等学校に入っても、ちっとも嬉しくない。一高を入りそこなってしまったものだから。まぁそんなことで、かえってまた病気なんかしてしまってね。……（一高寮歌「第18回紀念祭寮歌」省略）……

●一回即絶対・一回即永遠

最後にまた聖書に戻ります。詩篇の42篇、

「1**ああ神よしかの渓水（たにがわ）をしたい喘（あえ）ぐがごとく　わが霊魂（たましひ）もなんじをしたいあえぐなり**」（詩篇42・1）

即ち、神さまは谷川の水のごとく生命の水である。私はあなたという生命の水、キリストという生命の水に慕いあえぎ、そして、これを受けとります。

それから、もうひとつは黙示録です。黙示録の21章6節、

「6**また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渇く者には価なくして生命（いのち）の水の泉より飲むことを許さん。**」（黙示録21・6）

「生命の水の泉」

という句です。それから、同じく黙示録7章17節、

「17**御座（みくら）の前にいます羔羊（こひつじ）は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり**』」（黙示録7・17）

そして最後は黙示録22章の、

「1**御使（みつかい）また水晶のごとく透徹（すきとお）れる生命（いのち）の水の河を我に見せたり。この河は神**

と羔羊との御座より出でて都の大路の真中を流る。2河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を医すなり。」（黙示録22・1～2）

こういった

「生命の水の流れ」

という。どうですか、私たちの毎日において、やはりこのキリストという源流に棹さし、これに根を張り、魂の根を、この存在の根を本当にキリストの中に張って、そして進むならば、どんな巌をも打ち割って上へ伸びていく。樅の樹や松の木が岩石を割って、そして根を張っているでしょ。あのようなことにして、私たちの魂の根はキリストの生命の水に、本当の地下水に、永遠の水に、源流に通じて動いていく。ただ思われていたらダメですよ、

「それが私の現実であります」

ということ。

あなた方は祈る――もちろん祈られる――具体的な祈りは結構ですよ。けれども、一番根源の祈りの窮極のところはこの

「キリストと一つ」

にならなくては。そうしたら、具体的なことは知らない間にはずされていく、満たされていく。祈りながら、それは既に聞かれているということが受けとられていく。

「果たして聞かれたでしょうか？」

なんていうことを考える必要はない。

「現実はそれと反対になっても結構だ。もっと深い意味で聞かれているんだ」

と。そこが、

「汝の御意を成させたまえ」

なんだ。「汝の御意が成る」ということと、「祈りが聞かれる」ということが、これが表裏一体となったときに最後の世界です。だから、キリストが、

「しつこく祈れ」

という。ルカ伝18章です。

「あんまりしつこいから、あの女の言うことが。まぁ聞いてやれ」

なんてね、裁判人か何かが。

「いわんや、夜昼呼ばわるところの、汝らの祈りを神さまは聞かざらんや」

と。ということと、それから、

「わが意にあらず、汝の御意を」

と、全然矛盾したようなことを言っているけれども、矛盾ではない。悲願に絶するところに本願が成っている。悲願は悲願として持ってよろしい。しかし、それを乗り越えた本願を受けとるという角度がいつもその奥になかったならば、これは苦しいよ。本願が悲願を

貫き、また支え、またそいつを引っくり返し、成っていく。初めは、

「**わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし**」

と言いながら、最後には讃美になっているでしょ、あの詩篇22篇は。自分の心をなにも偽ることはない。ぶちまけていい。泣きたい時は泣いていい。けれども、最後は「ハレルヤ！」ということであります。だから、

「我々の信は即ち現（うつつ）なり」

と申し上げている。もう何回言うかしらん。

私たちの魂の世界は――あなた方の肉体でもそうでしょ――

「今朝、御飯を食べました。だから、もういいです」

なんて言ったら死んでしまうよな、また食べなくては、お昼も晩も。そういうように、魂はいつも神さまを、キリストを食べていなくてはいかん。

「もうキリストを食べたから、もういい」

なんて、とんでもないわけだ。また魂が飢えてしまうよ。いつも新たに、常に新たに。しかしながら、その「常に新たに」をやっていると――無意識の世界で空気を吸っていますね――そのように魂が無意識の世界で、深層の意識の世界で、キリストを生きていることになる。そしたら、もうどこでどうなっても、

「然り、アーメン・ハレルヤ！」

ということになってしまう。いいですね。

私は話ごとに窮極のところまで行かなければ承知しない人間なんだ。

「今日はまぁここまでにしておこう。明日はその次のことをしよう」

なんて、そんな小刻みに百回やったって、これは何にもならない。一回即ち絶対の世界に入る。

「もうこれで私は集会をしなくても、あなた方は前進していく」

というつもりでやっているわけです。そういう受け方をしてくれなかったら、

「一体、何年やったら、私たちはよくなるのだろうか」

なんて。一回でたくさんなんだ。

「一回即永遠」

ということであります。それだけの気合でこの集会に来ていなかったら、よした方がいいよな。

「今度の集会では、そうだな、五分の一くらい受けとっておこうかな」

なんてではダメだ。いつも百％に受けとってくださいよ。

終わります。讃美歌501番「いのちのみことば」を歌います。